

「かしもの・かりもの」について

立教 168 年 7 月 21 日 神殿講話

梅雨が明けて暑中見舞いを出す季節となりました。一年で一番暑い季節です。土用の入りが 7 月 19 日、丑の日は 7 月 28 日です。この日は夏バテしないようになぎを食べる日です。人間はいいかも知れませんが、うなぎには厄日だと思います。土用明けが 8 月 6 日だそうです。

この暑い中を勇んで 7 月の月次祭をつとめさせていただきまして誠にご苦労様でございます。当番に当てていただいておりますのでしばらくの間お付き合い下さいますようお願い申し上げます。

ご承知のように、私は 5 年前に脳梗塞の身上をいただきまして、不自由なこともあります。ままだけが重いつまみ、今日まで結構に通らせていただいて参りました。今尚、右半身が痺れています。頭は右だけが重い帽子をかぶっているようで、右肩から胸にかけては強力な接着剤でバシッと貼り付けられているようで、右腕、右足は常時痺れています。顔も右側、唇も右だけ痺れているんです。見た目にはどこが悪いのか？と思われるのですが、私の病気の症状はそんな状態です。前にもお話したことがありますが、最初は病気になったときは右足に力が入らない状態で歩くことも容易じゃなかったのですが、少しずつ歩けるように回復して、自動車の運転も右足の痺れが残りましたので、アクセルとブレーキの感覚がうまくつかめずに難儀しましたが、リハビリのお蔭で、自動車の運転もまた出来るように回復させていただきました。本当に有り難いことです。ここまでご守護いただいたのは、親神様、教祖の御蔭は申すまでもありませんが、関係します皆様方の多大のご真実をいただいた御蔭と喜ばせていただいております。

現在は、乳癌の方、肺ガンの方、肺炎の方、脳梗塞の方、B 型肝炎の方などおさづけを取り次がせていただいておりますが、そもそも「病気とは」どのように悟らせていただいたらいいのでしょうか。

「身上、事情は道の華」「身上は、神のかしものかりもの」とも聞かせていただきますし、「病の元は心から」とも「病むほどつらいことはない わしもこれからひのきしん」ともいいます。

おふでさきに「やまい」ということばは 40 箇所あります。

その最初の方ですが、

なにゝてもやまいいたみハさらになし
神のせきこみてびきなるそや

二号 7

世間の人々は、やれ病気だ、それ痛みだ、と言うであろうが、決してそうではない。それは皆、親神の深い考えからの急き込みであり、手引きなのである。

一寸はなしのぼせかんできゆうている
やまいではない神のせきこみ

二号 11

世間の人達が、寄ると触ると、あの人は逆上しているのだとか、狂気しているのだとかうわさをしているが、決して気違いでもなければ病気でもない。早くこの道に引き寄せたいと思う親神の急き

込みである。

このよふにやまいとゆうてないほどに
みのうちさハリみなしやんせよ

二号 23

この世の中には、病気というものは決してない。身体に故障が出来たならば、よく思案して、どう
いうための親神の道おせであるか、手引きであるか、を反省せよ。

病は、親神様の深い親心からたすけてくださるために引き寄せてくださったと考えるといいと思
います。なぜ引き寄せてくださったかといいますと「からだは神のかしものかりもの、こころ一つが
我がのもの」と仰るように、かりもののからだ病にかかるとは、そのからだはそれぞれの心
通りにからだを貸していただいています、その心がおしい、ほしい、にくい、かわい、うらみ、
はらだち、よく、こうまんのほこりの心を遣ってしまして、ちょうどいいタイミングで親神様は、
からだに身上という印を付けて引き寄せてくださり、からだは「神のかしものだよ」「親神様からお
借りしているかりものだよ」と教えてくださるんだと悟るのがいいと思っています。言い換えたら
「かしの、かりもの理」をわからせようと病気にしてくださったんです。

先の真柱様は、「天理教を信仰しているものと、天理教を信仰していないものとはどう違うか。それ
はかしの、かりもの理がわかっているか、わからないというだけの違いなのだ」と仰ったとい
うことです。

教典の第7章は「かしの・かりもの」です。

その冒頭に、
たいないゑやどしこむのも月日なり
むまれだすのも月日せわどり 六号 131

人体のこの精巧な構造、微妙な機能は、両親の工夫で造られたものでもなければ、銘々の力で動か
せるものでもない。すべては、親神の妙なる思わくにより、又、その守護による。

とあります。

この世に生を受けて、今、ここに命があって生かさせていただいている。宿しこんでもらい生まれ
出していただいて生きている。これが親神様のご守護の世界だと教えてくれています。

このかしの・かりものという言葉であります。おふでさき全編を通してみますと、神様の立場
からお前たちに貸したものだ、と仰有っている「かしの」と仰せになっているのが五カ所ありま
す。

にんけんハみな／＼神のかしものや
なんとをもふてつこているやら 三号 41

にんけんハみな／＼神のかしものや
神のぢうよふこれをしらんか 三号 126

このよふいーれつハみな月日なり
にんけんハみな月日かしの 六号 120

それよりもたん／＼つかうどふぐわな
みな月日よりかしのなるぞ 十三号 46

このはなしにんけんなんとをもている
月日かしのみなわがこども 十三号 79

人間の方から考えて、親神様からお借りしたものだという表現の「かりもの」という言葉は一箇所だけあります。

めへ／＼のみのうちよりのかりものを
しらずにいてハなにもわからん 三号 137

「かしの・かりもの」のお話は、全てのご守護頂く根本であり、基本の教理であります。
「かしの・かりもの」の話をよくわからせようとして、お話くださったのが、十柱の神様のご守護のお話と八つのほこりの説き分けだと教えていただいたことがあります。

辛い苦しい悲しいときがあっても、私はまだかけがえのない命を貸してもらっておるのだということ意識したことがあるかどうか。何故やろ、こんだけさせてもらっているのに、何故身上になるのやろ、何故こんな事情で苦しまねばならないのかと思う。

辛い苦しい難儀な時に、一番思い出さねばならんこと、それは私はまだ命があるということです。世間でも命あつての物だねといえます。健康であることが幸せではありません。身上事情を見せて頂きながらも、やっぱりこの世に生まれた限りは、今生、来世という世界はありますが、今生一日でも長生きしたい。そう考えましたら、今日こうして命を貸してもらっておるということを忘れてはなりません。

身の内かりものなら他のものも一切がかりものと教えていただきました。家族もそうだとつくづく思っています。

家内がちょっと留守をすると大変です。いてくれることが当たり前になっていますからそりゃ大変です。例えば食事の準備、男はなかなか煮炊きが出来ない人が多いからスーパーへ行ってすぐに食べられるものを探します。ここ一番すぐに食べられるもので最近、石焼ビビンバに嵌っています。これは安いし旨い。日本ハムの石焼ビビンバで2食入りで380円ぐらい。オオクワしか売ってません。調理済みのものは便利ですが、毎日ではお金が持ちません。そこで先日、味噌汁を作りました。味噌汁の具にジャガイモを剥いて、カットワカメを入れたんです。分量がわからない。ジャガイモが多過ぎました。ワカメもあんなに増えるとは思いませんでした。おわんの中は、ジャガイモとワカメで汁がありません。味噌汁ではなくておかずになりました。最近はやっと分量もわかってきましたけど。

洗濯も大変です。二層式洗濯と脱水が別になったものなら私でも使えます。しかし、全自動で失敗しました。全て自動ですから誰でもできると思っていたのですが、蓋を開けて、洗剤とハミングの入るポケットがありますが、そこへ洗剤とハミングを入れて洗濯しました。翌日も同じようにし

て洗濯しました。三日目になって、洗剤を入れるポケットが洗剤で一杯になりハミグも溢れ出しました。この洗剤を入れるポケットを中へ押し込まずに洗濯していたのです。二日間洗剤なしの水洗いをしていたこととなります。全然気が付きませんでした。しっかり学習しましたので、もう今では洗濯に関しては手馴れたものです。でも食事はまだまだ奥が深いです。

今までも食べる物に文句を言ったことは覚えがありませんが、これからは食べる物、着るもの全てにおいて不足してはいけないと教えられました。子どもたちも母親がいないとやはり寂しそうで、幾つになっても「お母さんは？」と探しています。改めて、家族もまた大切なかりものなんだとわかりました。

教典に

「この世に生れさせて頂き、日々結構に生活しているのも、天地抱き合せの、親神の温かい懷で、絶えず育まれているからである。即ち、銘々が、日々何の不自由もなく、身上をつかわせて頂けるのも、親神が、温み・水気をはじめ、総てに亘って、篤い守護を下さればこそ、いかに己が力や知慧を頼んでいても、一旦、身上のさわりとなれば、発熱に苦しみ、悪寒に悩み、又、畳一枚が己が住む世界となって、手足一つさえ自由かなわぬようにもなる。ここをよく思案すれば、身上は親神のかしものである、という理が、自と胸に治る。」とあります。

「かしの・かりもの」が解れば、からだを貸してくださっている親神様に感謝して、しっかりそのご恩をお返ししなくてはなりません。

「大恩忘れて小恩送るような事ではならんで。」（明34・2・4）と教えられました。

親神様の恩を感じる。感じたら今度は恩に報いる、報恩の心を持たなければならないし、それを人にも取り次がなくてはならない。にをいがけとは、感恩から報恩に進む道であるとも言えます。これが心の成人です。生かさせて頂いているこの大きなご恩を悟らせて頂いて、感謝の心を忘れず、喜び勇んで通るところにお道の信仰の喜びがあると思います。分かり切ったことでありながら、そのご恩に慣れてしまう、何とも思わずに通っていることが多いと思うのです。

今、NHKで「義経」が放映されていますが、

源頼朝が幼少のして、伊豆の蛭ヶ小島に流された時、誰一人として顧みる者がなかった中に、ただ一人甘酒屋の主人だけが甘酒をふるまいながら励ましました。

頼朝は、

「自分が世に打って出たら、このご恩は必ず…」

と、大いにその主人を徳としていました。

時来たって頼朝は旗揚げし、鎌倉幕府を開き、ついに征夷大將軍となりました。

それを我がことのように喜んだ主人が、頼朝を訪ねたところ、そんな素性の者は一面識なしと言って追い返しました。その時に主人が歌った歌が

「伊豆の国の 蛭ヶ小島の 甘酒は 喉元過ぎれば 熱さ忘るる」

だと言われています。「喉元過ぎれば熱さ忘るる」の語源はここからですね。

恩を知る者、恩に報じる者には天が味方しますが、あわれ忘恩の徒、頼朝の一生は疑い心強く、義経、範頼の肉親をはじめ多くの功臣を殺し、まことに気の毒な運命に終わりました。

「恩報じは出世の相、恩知らずは乞食の相」だと言われています。

結構なからだをお借りしているご恩を感じて、恩に報いる実動がひのきしんであり、にをいがけです。そしてにをいがけとはこの「かしもの・かりもの」を知らない人に「かしもの・かりもの」の話を取り次ぐ実動だとお教えいただいています。

ある時、

「教祖、これからおたすけに出させていただきますと出られた方がいました。

教祖は、「この道の話はなあ、かしもの・かりもの理より外ないで。かしもの・かりものということがしっかり心に治まるように、取り次いであげておくれ」とおっしゃいました。

「かしもの・かりものという理が心に治まったら、どんな病でもご守護くださるのやから、人間心をつかわないで、ただありがたい、もったいない、結構やと思って、しっかりかしもの・かりもの理を取り次ぎなされ」

ともお教えくださったのです。

「かしもの・かりもの理は、日々通らせていただく中に常に持たせていただかねばならんので」ともお教えくださっています。

また、

昔、高井直吉先生が地方へ巡教に出られた時、カバン持ちについて行った青年さんが、先生のお話の前に、ほんのわずかな時間ですが、前座のお話をしました。

その御用をつとめて、先生のおいでになるお部屋に帰って、

「結構につとめさせていただきました」

とお礼を言うと、先生は大きな声で、

「あんた、今話した話はこの話や。あんな話はお道の話やあらせんで。この道の話というのはなあ、教祖のご苦勞のお話とかしもの・かりもののお話を取り次がなんたらお道の話とはいわんのやで」

と厳しくお仕込みになりました。

とお聞かせていただいています。

「かしもの、かりもの」のご教理は、私も、何度も何度も聞かせて頂いてきましたが、話だけで本当に心に治まっていなかったと思っています。まだまだ何処まで解っているのかは解りません。でも病気になって初めて自分の意志だけでは自分の身体であっても動かない事だけはよ～く理解できました。喉元過ぎても熱さを忘れないように、私には、きっちり右半身痺れという後遺症を残してくださっています。そして身近にも身上に印を付けられた者をおります。

教祖百二十年祭は、あと半年後に迫って参りました。「かしもの・かりもの理」を今以上に心に治めさせていただきます、毎日毎日が、有り難い、もったいない、結構やと「かしもの・かりもの」お話を、にをいがけにおたすけにつとめさせていただきますと思っています。

最後に、今月26日から来月4日まで恒例の夏のこどもおちばがえりがつとめられます。暑い中ではありますが、お互い様に勇んでつとめさせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。